

ロータリーと歌

バスターガバナー 宮脇 富

ロータリーの会合で歌をうたう習慣はその初期からある。ロータリーの会合で歌をうたうということについては、ロータリーの規定には何にもない。然しこのことは、欧州のロータリークラブ以外では殆んど何処でも行われている。

1923年、私の母校である米国カンサス農科大学を訪れた時に、同大学化学の教授でウィラードという老先生が中食を共にしようと或るレストランに誘われた。そこには数十人の紳士が集っていた。中には旧知の友人もいたが、未知の人が大部分であった。教授はその主だった人々に紹介して呉れた。やがて食事が始まるや途端に皆で歌い出した。ウィラード老先生も大声張り上げて歌ったのには度胆を抜かれた。この老先生は、16年前に卒業論文を書いた時の指導教官であって、謹厳そのもので、歌などうたったのをきいたことはなかった。何時も苦虫顔で、滅多に笑顔など見せたこともなかった。その先生が大声をあげて楽しそうにうたった。それが一度ではなかった。食事を終えて行事に入る前にも歌った。行事の途中でも歌い、散会の前にも歌ったのであるから驚かざるをえなかったのである。然し会場は終始和やかに、談笑頻りに起り、行事も滑かに運び、お互に満足し、祝福し合い、次週再会の楽しみを約束するかのようであった。

これがマンハッタン・ロータリークラブの

例会であったことを知り、ロータリーというものは歌う会であり、友愛の坩堝であるというのが、ロータリーに対する第一印象であった。今になって見れば、同大学在中にロータリーはシカゴに生れていた訳であるが、そういうことは更に知らなかった。1920年には東京にもロータリークラブは出来ていたのであるが、それも知らずに、1923年8月になってマンハッタン・ロータリークラブにゲストとして誘われ、始めてロータリーを知ったのであるが、その歌のことが何よりも深い印象となったのである。

良く歌うロータリークラブは良いクラブだといわれている。事実そのクラブは至誠のクラブであり、友情溢れるクラブ、協力的クラブであるとされている。知り合いから友情が生れ、友情から奉仕の意欲が生れ、奉仕こそロータリーの団体的意義を示すものである。

歌はすべての場合に重要な役割を果すことが出来る。ロータリーの歌は声楽家のために作曲されたものでもなければ、音楽の才能ある人のためにつくられたものでもない。それは良い音声の持主であろうと、音痴の人であっても誰であっても歌えるようにつくられたものである。重要なことは、歌は毎週全会員が集る時のプログラムの一部となることである。それは各クラブに存在する協力の気風を強化し、会員間の親愛を増すものである。

ロータリークラブで現在うたわれている歌

の数は確かとは分からぬが、大体150種以上あるようである。各クラブ会長、ソングリーダー及び会員が歌について知っておる必要のあることは4つあるといわれている。それは

1. ロータリーで歌うということは、社会的結合であり、クラブの結束を齎す。
2. ロータリーで歌うということは、お互の気持をほぐし、休養にもなる。
3. ロータリーで歌うということは、ロータリアンにロータリーの精神と情熱を浸透せしめる。
4. ロータリーで歌うということは、簡単にいって芸術及び音楽界の先駆となる。

この歌をうたうことを最初に主唱した人はハリー・ラッグルスであった。



ハリー・ラッグルス

ハリー・ラッグルス

ロータリーの発案者はポール・ハリスであり、創立者はポール・ハリス、シルベスター・シール、ガスターブ・ローア、ハイラム・ショーレー4人であった。然しシカゴ・ロータリークラブは、これら発起人の他に、その共鳴者を加えて自然に結成せられたものである。それらの人々は、それぞれ新しいクラブについて色々な構想を齎らした。ロータリーという名称もその所産であり、ロータリーの徽章もその頃の発案であった。

ロータリーは会員相互の友愛が根本となって出来たものである。ロータリーの会合には、その会員の間に親密な友愛の雰囲気齎すことの必要性は皆の一致した意見であった。然らばその雰囲気をかもすにはどうすれば良いか。これに答えたのがハリー・ラッグルスであった。

ハリー・ラッグルスはポール・ハリス、シルベスター・シール、ガスターブ・ローア、

ハイラム・ショーレーに次いで第5番目にロータリアンになった人である。彼はシカゴ・ロータリークラブの会員間では“第5番ロータリアン”という愛称を以って知られていた。

彼には音楽の素養があった。そこで彼は、シカゴ・ロータリークラブ創立間もなく、クラブの会合で歌を合唱することを提唱した。この提案は直ちに採択され、例会で盛んに歌をうたうようになり、会合は和やかになり、会員は楽しく打ち解けて話すようになり、会員間に真の友情が盛り上って来た。

此の良い思付は、ロータリーの真髓である友交の下に奉仕する根幹を培うものであるといふので、シカゴ・ロータリークラブでは、これを例会の一重要行事として取り入れるに至った。勿論、この唱歌ということはロータリーの規定には何もない。それは単に友交の手段としての慣行である。然し、この習慣

は第2のクラブ第3のクラブと次ぎ次ぎに結成せられたクラブがこれを取り入れている。今日では、欧州のロータリークラブを除いては、何れのロータリークラブでも例会その他の会合で何等かの歌をうたっているのである。今は四六時中世界の何処かでロータリー・ソングはきかれるであろう。

その発案者ハリ・ラッグルスは印刷業者で、シカゴ・ロータリークラブの初代会計を勤めた。彼はシルベスター・シール、アルバート・ホワイト及びポール・ハリスに次でシカゴ・ロータリークラブ第4代目の会長となった。アメリカ合衆国の全国ロータリークラブ連合会ができたのは、彼の会長時代であった。

ロータリーに春風駘蕩の雰囲気植えつけたハリ・ラッグルスもまた、ロータリー史上忘れることの出来ない人物の一人といわなければならない。ロータリークラブで会報を出したのは彼が初めてであって会報名は Rotary Yell と称していた。彼は1958年2月号の The Rotarian に So I Said と題してロータリー誕生当初の事情を書いているが、これまでの文献に見られない面白い事項を挙げてゐる。猶お、同年3月号にはポール・ハリスのことを書いた。彼は1959年10月、88歳の高

齢でロスアンゼルスで長逝した。

ロータリーのソングリーダーとして世界的に有名なウォーター・エル・ゼンキンスは“声の出る人であれば、誰でも歌える”といっている。彼はそのホームクラブは勿論、彼の出席しているロータリーの会合では、常にソングリーダーをつとめて、いつも会をなごやかにして人気がある。然しそれは後のことであって、ロータリーの初めの頃はハリ・ラッグルスがつねにソングリーダーとして活躍していた。彼はシカゴ・ロータリークラブでは、椅子に飛び上って、大声をはり上げて“さあ皆で歌おう”といったものである。

ロータリーの会合で歌をうたうことについては色々な意見がある。或るロータリアンは威厳のある職業人は公開の席では歌うべきではないといい、或る他のロータリアンは“特別の場合に限り歌うべきだ”といっている。然し大多数の人は“歌をうたえば親善を生む。親善を生む如何なるものも価値がある”ということに一致しているようである。ミゲル・デセルバンテは“歌う人は悪事を吹きとばす”といっている。歌って邪念を吹きとばそう。ロータリーに真に親善の意を植えつけこれを培った、ハリ・ラッグルスを再びここに称えよう。